鄭燮の創作論に誘発されて

澤田雅弘
SAWADA Masahiro

なにかの参考にと思って、購入してあった『警語名句詞典』（長征出版社、一九九八年、六八四頁）を数ページ繰ってみたら、ところどころに下線を引いてある。以前に利用したに違いないが、とんと思い出せない。ともかく、面白くなって三分の一ほど読み、翌日も継続して半分近くまで読み進めた。鄭燮（一六九三～一七六六）の「不泥古法、不執己見、惟在活而已矣。」の十四字は、その際目に留まってノートに転記した字句の一つで、鄭燮六十二歳の上海博物館蔵「竹石図」（紙本217・4×120・6㎝）に、得意の六分半書で入れた四行の題記の末三句に確かに見え、その別集の補遺の類にも収録されている。題記の全文は次のとおりである。

昔東坡居士作枯木竹石。使有枯木石而無竹、則黯然無色矣。余作竹作石、固無取于枯木也。意在画竹、則竹為主、以石輔之。今石反大于竹、多于竹、又出於格外也。不泥古法、不執己見、惟在活而已矣。漸老年兄属、乾隆甲戌（十九年、一七五四）重九日、板橋鄭燮画。（昔 東坡居士 枯木竹石を作る。使し枯木石有りて竹無くんば、則ち黯然として色無からん。余 竹を作り石を作るも、固より枯木に取る無きなり。意は竹を画くに在れば、則ち竹を主と為し、石を以て之を輔く。今 石反って竹よりも大きく、竹よりも多し。又 格外に出づるなり。古法に泥まず、己の見を執らず、惟だ活に在るのみ。漸老年兄の属、乾隆甲戌重九日、板橋鄭燮画く。）

依頼者の漸老は特定できない。該画は題記に説くとおり、乾いた明るい筆致で皴をわずかに施しただけの奇石を、中央に大きく屹立させ、その左右にも小ぶりの二石を配してある。竹は篠同然の細身で、石前に遠慮気味に添え葉も疎らである。

さて、十四字に説くところは特段真新しくはないが、伝統的な書画創作論の要を尽くしている。そもそも古法の修得は普遍的理法の会得上必須だが、古法の麾下に成るわけではないので、最終的には

古法からの開放が求められる。しかし、ことさら開放に趨っては、暴慢に陥って造化の理に反し、格調を下げる。こうした関係を説く論は列挙しきれない。それぞれ力点や表現は異なるものの、主旨は一類である。たとえば私が本学で担当する科目「書論講読」の私製テキスト内に収めた中から例示しても、次のとおりである。

・凡臨古人、始在能取、継在能舎。（凡そ古人を臨しては、始めは能く取るに在り、継いで能く舎つるに在り。）清・王澍『論書賸語』

・字熟必変。熟而不変、庸俗生厭。字変必熟。変不由熟者、妖妄取笑。（字は熟せば必ず変ず。熟して変ぜざるは、庸俗にして厭を生ず。字の変は熟を必とす。変の熟に由らざる者は、妖妄にして笑を取る。）明・趙宧光『寒山帚談』

・古人于書、大抵晩歳帰于平淡。而含渾収斂、多若不経意不用力者、無復少年習気矣。（古人の書に于けるは、大抵晩歳平淡に帰す。而して含渾収斂し、多く意を経ず力を用いざる者の若くにして、復た少年の習気無し。）清・梁巘『承晋斎積聞録』

こうした一類の創作論の中で、鄭燮の十四字は実に簡明で直截の論に思えるが、「活」の一字は、書論画論ともに多くは用いられないので、物の本を借りてひととおり眺めてみた。

・墨著縑素、籠統一片、是為死墨。濃淡分明、便是活墨。死墨無彩、活墨有光。不得不亟為辨也。（墨縑素に著き、一片を籠統するは、是れ死墨と為す。濃淡分明なるは、便ち是れ活墨。死墨には彩無きも、活墨には光有り。亟かに辨を為さざるを得ざるなり。）清・沈宗騫『芥舟学画編』巻一「山水・用墨」

・行行要有活法、字字須求生動。（行行活法有るを要し、字字須らく生動を求むべし）宋・佚名『翰林粋言』（『佩文斎書画譜』所収）

・活筆、斯不呆不滞而尖者円者皆真筆矣。不浮不飾而瘦者肥者皆真物矣。（活筆なれば、斯ち呆ならず滞らずして尖なる者 円なる者も皆真筆なり。浮かず飾らずして瘦なる者 肥なる者も皆真物なり）清・翁方綱『復初斎文集』尖円肥瘦説

・能用筆便是大家名家、必筆筆有活趣。（能く筆を用うれば便ち是れ大家名家、必ず筆筆活趣有り。）清・佚名『書法秘訣』

このほか詩論にも用いられるが、いずれも「活」義を念頭におけば説かんとするところは容易に理解できる。

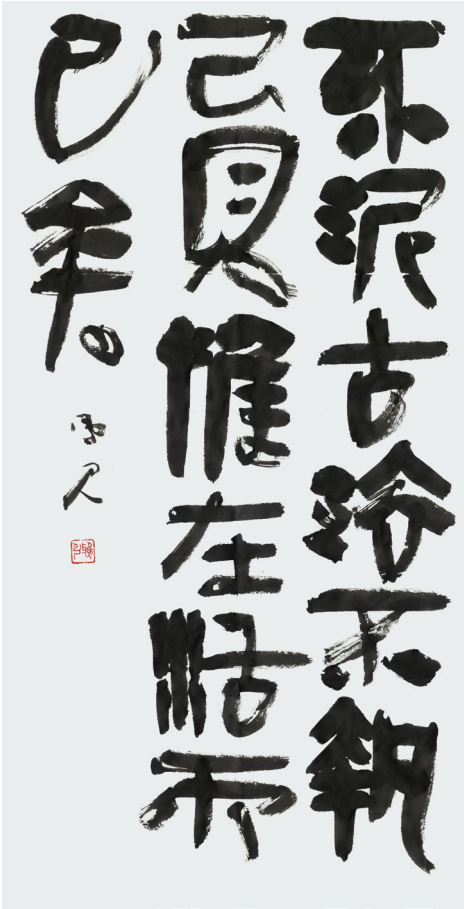
この十四字に誘われて、早速、ペンで粗々草稿を書き、全紙三行でいこうと即断した。学生へのメッセージにも適うので、本年度の卒業修了展の賛助出品にしようと思った。

例年同様、書作に専念する日程を予定してあったが、今夏身に異変が生じて予定が狂った。突然激しい頭痛に襲われ、悶絶して睡眠も食事もかなわず、入院を覚悟したからである。精密検査の結果、

疑われた疾病の所見はないというので、自宅で服薬しながら様子をみることになった。幸い激痛は徐々に軽くなり炎症も収まっていったが、薬の副作用で不眠に悩まされた。不眠は発病前と合わせて十日を越え、体は著しくやつれ上腕も驚くほど細くなった。歩行もふらつき眼も霞んだ。これでは書作は無理だと諦めたが、一週間後気力が戻りはじめた。さらに五日ほどの静養で筆を執りたいと思うまでになった。ただ当初計画の全紙は書く筋力がなく、卒業修了展用には全紙半分に四行で書くことにした。休憩を挟みながら三枚書いたところで疲労とめまいを覚え、翌日筆を取り換えて二枚書き、その二枚目で仕上げた。

その日は体力に多少余裕があるように感じ、十四字の感興にも後押しされて、三行の布置でも書いてみたくなった。全紙を半切二分の一に縮めて躊躇わず三枚書き、さらに筆を換えて二枚書いた。こちらも最後の一枚を残したが、消耗した気力体力を振り絞ったためか、室内に十日ほど吊るして眺めていると、しだいに清朗の無さが目に障るようになり、耐えらなくなって書き直した。

書き直しに用いた筆は、四十代のころに購入した仿古堂の「暖心」三号。紙は台湾画仙「厚口金龍」、墨は呉竹「磨墨液抱雲」。図は五枚ほど書いた最後の一枚である。印は朱文「雅弘」、院生のときに田邊齊廬先生に刻していただいた一顆である。



不泥古法、不執己見、惟在活而已矣。

68×34.5㎝